

Immediate Press Release 2017.6.30

# 荒木経惟 写狂老人A

## ARAKI Nobuyoshi: Photo-Crazy A

謹啓 向暑の候、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は、東京オペラシティ アートギャラリーの展覧会活動に対して、格別なご高配、ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、先の6月7日付けリリースでお知らせ致しましたとおり、当館では2017年7月8日〔土〕より展覧会「荒木経惟 写狂老人A」を開催致します。本展は、ゲストキュレーターに北澤ひろみ氏を迎え、新作だけで1000点をこえる膨大な量の作品を通して、まさに荒木経惟の「現在」と、その活動の核心を世に問う試みです。

つきましては、本展の見どころと展示構成をご紹介しますので、「荒木経惟 写狂老人A」を貴媒体で是非ご紹介いただきたく、ご協力のほどお願い申し上げます。 謹白

### 【見どころ】

#### ◎最新作一挙1000点で荒木経惟=写狂老人Aの現在進行形が見えてくる!

荒木は2011年以来、江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎が老いてなお一層精力的に制作し70代半ばで「画狂老人記」と号したことになぞらえ、自ら「写狂老人」を名乗り、文字通りの旺盛な制作を展開しています。その荒木が撮り下ろした新作1000点以上を一挙公開する本展は、まさに荒木経惟の現在進行形にほかなりません。

#### ◎膨大な作品の集積が意味するもの

荒木は「量のともなわない質はない」と語り、作品の量に大きな意味を見出しています。荒木にとって一点一点の表現だけでなく、むしろ膨大な量を撮り、集積していく行為の中にこそ、写真の本質がひそんでいるのです。膨大な作品の連なりから見えてくるもの——人生をめぐるさまざまな関係性や出来事、時間の推移、そして生と死など——に、私たちも眼をこらす必要があります。

#### ◎新たな「生と死」への眼差し

とりわけ「生と死」の問題は、荒木の写真の重要なテーマです。愛する身近な者たちの生と死を撮り続けることで、荒木は写真の本質について洞察を深めて来ました。近年は、癌や片目の視力喪失などを自ら体験し、生と死への眼差しをさらに深化させています。出品作には、現在荒木が到達している新たな死生観を鮮明に見ることができるでしょう。「混ざっているんだよね。死の中で。死ってのが生きてるっていうか、動いてるっていうか。だから動く死だね」(2017年4月のインタビューより)

#### ◎新作のすべてを印画紙プリントで展示

昨今インクジェットプリントによる写真展示が一般的となっていますが、本展では、新作はすべて印画紙プリントで展示します。これはフィルムカメラにこだわり、「印画紙は魔法の紙」と語る作家の強い意向によるものです。荒木が、ある種職人的な「焼き」の技術を必要とする印画紙プリントを選んだことには、写真メディアの本来的な力に対する洞察と、今日のデジタル環境に対する批判精神がこめられています。荒木にとって、「写真」の魅力は、単なるイメージの操作ではなく、ある種の物づくりの感覚と切っても切り離せないものなのです。

#### ◎1960年代の幻のスクラップブックも初公開!

荒木の制作の原点を探るべく、プリントからレイアウトまで、すべて荒木自身が手作りで制作した1960年代のスクラップブック形式の実験作《八百屋のおじさん》第1巻を初公開します。また、ポラロイドによる作品や、あえてデジタルで撮った近年の作品なども加えることで、荒木の活動の多面性を浮き彫りにします。



photo: 野村佐紀子

**[展示構成]**

**1. 大光画 ※新作**

さまざまな年代の人妻たちを捉えた最新シリーズ。荒木を信頼しきって「性」を超越し「生」を謳歌する女性たちに、荒木のカメラが無敵大のエネルギーをもって応えます。その力強い生命力を、巨大な絵巻物のような展示で際立たせます。荒木は、この最新シリーズこそが「いま自分が考えている『写真』にもっとも近い」と語っています。それは画一的な美の基準やグラビア写真に対するアンチテーゼでもあります。



《大光画》 2017



《大光画》 2017



《大光画》 2017

**2. 空百景 ※新作**

荒木の自宅のバルコニーから日々の「空」を捉えたモノクロームプリント100点のシリーズ。タイトルは、葛飾北斎の『富嶽百景』にちなんでいます。空は、荒木自身もっとも「手強い」と語るモチーフで、すぎゆく雲や大気の状態、光や影をあたかも物（ブツ）として捉えるかのような作品は、此岸と彼岸（この世とあの世）に対する荒木の眼差しを感じさせます。



《空百景》 2017



《空百景》 2017

**3. 花百景 ※新作**

江戸時代の絵師、伊藤若冲の《百花図》に触発されたこのシリーズは、咲き誇り、枯れてゆく花を捉えたモノクロームプリント100点からなります。繊細で重層的なグラデーションは、まさにモノクロームの豊かな表現によるものです。従来の作品に見られた人形などの小道具を排して花だけを捉えており、荒木のより純化された眼差しが感じられます。



《花百景》 2017



《花百景》 2017

#### 4. 写狂老人A日記 2017.7.7 ※新作

荒木のライフワークである「日記」シリーズの最新作。700点近い作品は日付表示がすべて今年の7月7日に操作されています。7月7日は今は亡き妻、陽子との結婚記念日です。日常を淡々と、恣意的な要素を排して捉えており、撮られた順序そのままに展示されます。人生を彩る「時間」の流れと、なにげない日常のなかにかいま見える生と死のテーマが、鮮やかに浮かび上がります。



《写狂老人 A 日記 2017.7.7》 2017



《写狂老人 A 日記 2017.7.7》 2017



《写狂老人 A 日記 2017.7.7》 2017



《写狂老人 A 日記 2017.7.7》 2017

#### 5. 八百屋のおじさん ※初期作品（制作から半世紀振り初公開）。

現在にいたる荒木の原点として重要な初期のスクラップブック《八百屋のおじさん》第1巻。電通勤務時代の荒木が、銀座で行商する青果商を昼休みに足繁く通って撮り続け制作したものです。人々の日常が映画の手法を思わせる人情味溢れるタッチで活写されています。プロジェクターによるスライドショーなども加えてその魅力を十分に伝えます。

《八百屋のおじさん》 1964



#### 6. ポラノグラフィー ※継続中のプロジェクトより

荒木が2002年から継続的に行っているポラロイド作品の展覧会とその出品作のアーカイヴ映像を紹介します。ポラロイドの特性を生かして日々の出来事や時間を捉える荒木のカメラワークが冴えわたります。「ポラ（ロイド）」の「グラフィー＝記述、記録」を意味すると同時に、ポルノグラフィも思わせる荒木独特の言葉遊びによるタイトルも秀逸です。

《ポラノグラフィー》 2002-2017

#### 7. 非日記 ※継続中のプロジェクトより

2014年のカルティエ現代美術財団でのプロジェクトに端を発し、会員制ウェブサイトで継続されてきたデジタルカメラによるシリーズからの抜粋で、本展ではプロジェクターによるスライドショーで紹介します。「日記でありながら日記に非ず」を意味するタイトルは、デジタルは「写真でありながら写真に非ず」の意にも通じ、荒木のデジタルに対する逆説的で突き放したアプローチが目立ちます。



《非日記》 2014-2017



《非日記》 2014-2017

#### 8. 遊園の女 ※新作

浮世絵の世界から現れたかのような着物姿の女性のモチーフは、特に海外では日本的でエキゾチックなイメージとしてアラキーの代名詞ともなっています。その最新作である本作では、プロのモデルではない一般の既婚女性をモデルに撮影しています。遊郭から足抜けしようとする遊女を女衞（ぜげん）となった荒木が捕らえるといった趣向ですが、本当に捕らえられているのは誰なのでしょうか――。



《遊園の女》 2017



《遊園の女》 2017

## 9. 切実 ※新作

荒木はごく初期より、自作にハサミをいれたりコラーージュしたりする試みを行っています。《切実》はそうした先鋭的な作品の最新バージョンで、プリントした無数の写真をハサミで切断し、組み合わせを変えてコラーージュしています。荒木にとってハサミで切ることも、コラーージュすることも、カメラのシャッターを押すことと同じ感覚だといいます。またタイトルは、「写真は真実」という観念を逆手にとって、写真＝真実を切るから切実である、という意味と、同時に写真は「切ない真実」でもあるという、さまざまな意味を含んでいます。



《切実》 2017



《切実》 2017

### ◎関連イベント

対談「写狂老人 A について考える」

日時:2017年8月12日 [土] 18:00 — 19:00

出演:倉石信乃 (明治大学理工学研究科総合芸術系教授) × 北澤ひろみ (本展ゲストキュレーター)

会場:東京オペラシティ アートギャラリー (展示室内)

申込不要 (参加には当日入場券が必要です。また参加状況により入場制限を行う場合があります。)

### ◎東京都写真美術館との展覧会相互割引

東京都写真美術館の企画展「荒木経惟 センチメンタルな旅 1971-2017-」(2017/7/25-9/24)の入場券をアートギャラリー受付でご提示いただくと、本展入場券が団体料金になります。また東京都写真美術館「荒木経惟 センチメンタルな旅 1971-2017-」へご入場の際に本展入場券をご提示いただいた場合も団体料金になります。(他の割引との併用不可、ご本人様1回限り有効)

東京都写真美術館 <https://topmuseum.jp> TEL:03-3280-0099

### 【開催概要】

展覧会名: 荒木経惟 写狂老人 A

会期: 2017年7月8日 [土] — 9月3日 [日]

会場: 東京オペラシティ アートギャラリー

開館時間: 11:00 — 19:00 (金・土は20:00まで/最終入場は閉館の30分前まで)

休館日: 月曜日 (祝日の場合は翌火曜日)、8月6日 [日・全館休館日]

入場料: 一般1,200 (1,000) 円/大・高生800 (600) 円/中学生以下無料

\* 同時開催「収藏品展059 静かなひとびと」、「project N 68 森 洋史」の入場料を含みます。

\* 収藏品展入場券200円 (project Nを含む/割引無し) もあり。

\* ( ) 内は15名以上の団体料金。

\* 障害者手帳をお持ちの方および付添1名は無料。

\* 割引の併用および入場料の払い戻しはできません。

お問合せ: 03-5777-8600 (ハローダイヤル)

ウェブサイト: <http://www.operacity.jp/ag/exh199/>  <https://www.facebook.com/tocag>

主催: 公益財団法人 東京オペラシティ文化財団

特別協賛: ジャパンリアルエステイト投資法人

協賛: 株式会社写真弘社

協力: 相互物産株式会社、株式会社フレームマン

企画: 北澤ひろみ (ゲストキュレーター)

リリースに関するお問い合わせ

東京オペラシティ アートギャラリー 【展覧会担当】 福士 【広報担当】 吉田

Tel:03-5353-0756 / Fax:03-5353-0776 / Email: [ag-press@toccf.com](mailto:ag-press@toccf.com)